「いつの間にか」

福住中学校 2年 西田　丞

私は少し前に学校から帰る途中に大きな声で叫んでいる人がいて、その大声に驚いて、道を変えて家へと帰りました。でも、後からこのことを思い返してみると、その人は杖をついていたので、もしかしたら、その人は障がいがあり、道を変えてしまったことは失礼なことだったのではないかと疑問をもちました。このできごとが私に差別について考えるきっかけを与えてくれました。今回、障がいがあること、人種がちがうことで生じている差別について、私の考えを述べたいと思います。

まず、障がいに関することです。一部の人々の中には無意識のうちに障がいがあるという理由から失礼なことをする人がいます。これを解決するためには、権利の必要性について再認識する必要があると私は考えました。人は誰でも人間らしい生活を送る権利を平等に持つことが人権として定められています。その人権を大切にすることがこれからの社会において、何よりも必要なことだと私は思います。しかし、実際にはSNSでは特定の人に対する誹謗中傷などの書き込みをよく目にします。これはその人の権利を揺るがすもので許される行動ではありません。ましてや、その権利を軽視したり蔑んだりすることはもってのほかです。書き込んだ人も軽い気持ちでこのような行動に至ったのかもしれません。しかし、この軽い気持ちが生んだ行動が心に深い傷を負わせてしまうことになります。このような差別が日常生活だけでなくSNS上にもはびこっているような今の社会では、平等な社会とは言えません。

次に、人種についてです。外国籍の男が日本で強盗殺人事件を起こしたという趣旨のニュースがあったとします。そのニュースを見た人は、その国の治安は悪いのだろうと勝手な偏見を持つ人もいるでしょう。実際にどうなのかはわからないにも関わらずです。これは一部の事件から勝手に断定してしまっているので、いつの間にか差別をしているという事例なのだと考えられます。世界に目を向けると人種の違いから差別をしたり、差別をされたりする人々が大勢います。昔から特定の人種に対する差別が今でも起こっています。過激な差別は減ったという人もいますが、未だに差別は残っており、それに傷ついている人々が大勢います。経済的に豊かになったとしても精神的な豊かさが追いついていないというケースも感じます。

障がいの有無、人種、性的指向などに違いがあっても同じ人間であるということは紛れもない事実です。差別というのはその違いを否定し、その人の尊厳を傷つける行為です。この差別を根絶することができなければ、社会にはずっと差別が横行し、一部の人の権利が奪われていくままです。軽い気持ちでも差別には重い責任がかかります。人がひとりひとり違った感性や個性を持っているのは当たり前です。その当たり前を否定せず、受け入れることで人々が人間らしく生きることのできる平等な社会へと着実に近づけるのではないかと思います。多くの人々は差別がいけないことだということを理解しています。しかし、理解をしていたとしても、それだけではいつの間にか差別をしてしまうこともあります。重要なのは表面的な理解ではなく、それよりも深い無意識のレベルから変わることです。それができれば社会も変わると思います。人類の長い歴史から、今すぐに差別が「0」の世の中にすることは難しいかもしれません。また、差別をする人がされる人の気持ちを意識しないことが多いこともまた事実です。まずは、ひとりひとりの意識を変えていくことこそが、多くの人々が少しでも生きやすい社会への第一歩になると私は強く思います。